

# アルメニアの内と外

**吉村貴之** 東京大学大学院総合文化研究科産学官連携研究員

## —古い移民、新しい移民

「シルクロード」という言葉は、19世紀の終わりにドイツの地理学者リヒトホーフェンが、『ヒーナ *China*』という本の中で、「シルクロード」という言葉を使ったのが始まりです。それで地理学者リヒトホーフェンの弟子でヘディンという有名な探検家が、自分の旅行記などでこの「絹の道」という言葉を使って一般化したと言われてい



たと言われています。その当時の「シルクロード」という言葉の指し示した地域は、中国の西域で、せいぜい「中央アジアのオアシス都市に繋がる道」を指していました。その後だんだん「ユーラシアの東西交易路が通っていた地域」というように拡大解釈されてきて、今では「中国からローマまで」という範囲で使われるようになっていきます。まさに、シルクロードという概念が西へ西へと拡大していった、その西の果てにあるのが、今日お話ししますアルメニアになるわけです。

このアルメニアはコーカサス地域の小さな山国です。アルメニア人はここだけにいたわけではなくて、実際にはもう少し広い地域に分布しておりました。アゼルバイジャンとか、グルジアとか、現在のトルコの東部、あるいはイランのあたりに元々住んでいた山岳民族であったわけです。

この地域は、まさにシルクロードと言われる東西交易路と、さらには、イラン、イラク方面から、コーカサス山脈を抜けてロシア方面へと広がっていく南北交易路の十字路に当たっていたということもありまして、古くから交易が盛んな地域でありました。

ところが、この地域は地震地帯で、よく地震に襲われて多くの犠牲者が出ています。アルメニアでは1988年に大きな地震が起こって犠牲者が出ました。そういうこともあって元々住んでいた所を捨てないといけないとか、あるいは、交易路

ということは、当然ながら戦乱も非常に多い地域でしたので、そこでの生活ができなくなって、人々が他の地域に移っていきました。あるいは、現在の労働移動と同じですが、もっとよい職業を求めて農村から都市に出て行くということを繰り返しまして、伝統的にアルメニア人は、コーカサス地域から、近隣のトルコやイランあるいは南ロシアの都市へと移住を繰り返してきました。

移住先の地域では、たとえば手工業あるいは商業、あるいは芸能活動

といった業種を営んでいる人が多いです。そのため、よくアルメニア人はユダヤ人と比較され、「コーカサスのユダヤ人」という言われ方をします。

だいたい、19世紀には既にユーラシア各地にアルメニア人のコミュニティが形成されていました。とくに、ヨーロッパ、ロシア、イラン、インドあたりです。特に対ヨーロッパ貿易では、アルメニア人が同じキリスト教徒ということがヨーロッパ人にとっては信用できる相手と思われたようで、商取引のときにアルメニア人はたいへん有利な立場にありました。

また、インドから東の地域に進出する時には、イギリスの進出とほぼ同じ時期に、アルメニア人たちの販路が拡大していったということが、研究でわかっています。以上が伝統的なアルメニア人の拡散の仕方だったわけですが、これが20世紀に入ってきますと、もう一つ大きな移民の波が起こります。

それは、第一次大戦中の1915年、オスマン帝国、今のトルコですが、そこで起こったアルメニア人の虐殺・追放という事件でした。もっとも、この事件そのものについては今回あまり深入りいたしません。

大体の事件の背景としては、第一次世界大戦時に、ロシアとオスマン帝国が交戦状態に入っていたことにあります。今のアルメニアのあるあたりはロシア帝国領だったのですが、ロシア帝国からオスマン帝国にまたがって住んでいるアルメニア人は、ロシアのスパイであると、オスマン帝国側から疑われて、この地域から追放されたという解釈があります。この事件をきっかけに、アルメニア人は近隣諸国や、さらには欧米に移住することになりました。

ここで、写真を少しだけお見せいたしましょう。こちらがアルメニア本国の首都エレバンから少し北に行ったところにある、セヴァン湖と呼ばれている湖です(写真01)。アルメニアを代表する風景の一つなのですが、大体山岳地域は水資源が豊富というのは、先ほどのタジキスタンと同じです。





写真01 セヴァン湖  
(写真はすべて筆者撮影)



写真02 ハグパット修道院

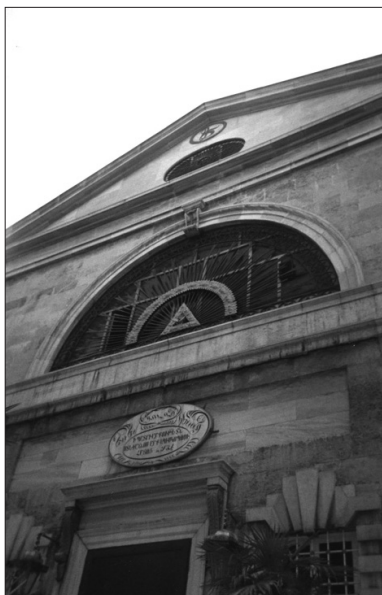


写真03 三祭壇教会

もう一つ、これはアルメニアの北部にあります、ハグパットの修道院です(写真02)。これは世界遺産に登録されて有名になった修道院です。アルメニアがキリスト教国であるということをよく表す建物です。

こちらはトルコ最大の都市イスタンブルにあるアルメニア教会です(写真03)。オスマン帝国時代には、アルメニア人が首都のイスタンブルに多数移住して、巨大なコミュニティをつくっていた証です。現在アルメニア人は、トルコからほとんどいなくなってしまいましたが、それでもイスタンブルにはごく一部残ってしまっていて、こういうアルメニア人のための教会が現在でも使われております。

では、続きまして、アルメニア人たちは移住先でどういう生活をしているのか、いくつか例を取り上げてお話しします。欧米では、特にアメリカとフランスにアルメニア系の住民が多いので、この二カ国の話にします。

フランスでは、オスマン帝国から逃れて来たアルメニア人に社会主義革命を逃れてロシア方面からきたアルメニア人も加えて、マルセイユやパリに大きなアルメニア人のコミュニティができています。現在ではアルメニア系移民たちも現地の社会にずいぶん溶け込んでしまっていて、言葉もアルメニア語がだんだん話せなくなり、むしろフランス語のほうが得意であるという人が多くなってきました。作家やサッカー選手など、フランスでも活躍している人がいます。その中で、シンガーソングライターのシャルル・アズナプールという有名なシャンソン歌手がいますが、本名はアズナブリアンといひます。

アルメニア人の苗字の終わりには、「～

イアン」とか、「～ヤン」という語尾が付きます。これは「誰々の子ども」という意味を表す語尾で、大体この語尾を見ればアルメニア人なのかと思っていただけでほぼ正解です。

一方、アメリカでは、アルメニア系住民がカリフォルニア州と五大湖の周辺に、多く集まっています。特に西部の移民は農業移民が多かったのです。それはカリフォルニアの気候が自分たちがもともと住んでいたコーカサスの気候とよく似ていて、特にぶどう栽培が可能であるということで、伝統的なワイン醸造の仕事を続けることができたということもあったのだと思います。カリフォルニアの中部にコミュニティが集まっています。

最近では都市化の波に乗って、特にロサンゼルス周辺に移ってきて、その近隣にあるグレンデール市は、人口20万人のうち、3割弱がアルメニア人といわれています。このグレンデール市のことを、よく「リトル・アルメニア」と現地の人たちも呼んでいるくらい、アルメニア人の人口が高い地域です。

そして、アルメニア系アメリカ人の中で知られた人としては、一昔前に日本のロッキード事件で有名になりました、アーチボルト・カール・コーチャンという、ロッキード社の副社長、それから最近では昨年（2006年）、ルノー・日産とGMの提携をゴリ押ししたことで非常に有名になってしまいましたが、不動産王で投資家である、カーク・カーコリアンという人物がいます。お金持ちが多いです。日本でアルメニア系の人たちが報道される時には、たいていお騒がせな人ばかりですので、何となくアルメニア人は悪徳商人というイメージがついてしまうのが、非常に困ったことです。もちろん、そういう人たちはばかりではないのですが、どうしても目立つ人はそういう人になるということなのでしょう。

財界や実業界で活躍している人が多い上に、アルメニア人は非常に政治意識が高いということが挙げられます。アメリカの議会でも、ユダヤ人団体の次に強力な圧力団体といわれる、ANCA（在米アルメニア国民委員会）という団体が活動しています。しばしば他の民族から、「アルメニア人はいつも同胞だけで集まって、非常に閉鎖的である」という批判を受けることもあります。これは、一つは冷戦時代に、在米アルメニア人コミュニティでは、親ソ派と反ソ派に分裂していて、その中で主導権争いを繰り返してきたという背景があります。そのうえ、このようなアルメニア人の政治団体の中では、トルコで起こったアルメニア人虐殺問題を、何とか国際的に認知させようという政治運動を繰り返してきたということが、大きく影響しているのではないかと思います。以上がアルメニア人の置かれた状況の概要でした。

## ——カラバフ紛争の経過とアルメニアの独立

ところで、冷戦期にはソビエト・アルメニアという国がありました。つまり、

ソ連の中の、形の上では自治を認められた共和国でした。この本国のアルメニア人と外国にいるアルメニア人の関係というものは、しばしば複雑な関係をみせることになります。

その一つの経過として、アルメニア人の帰還運動があります。これは1920年代、ソビエト政権ができた直後に起こりました。それから1950年代。これは第二次大戦が終わった直後です。特に1950年前後というのは、第二次大戦でソ連が2000万人近くの犠牲者を出し、非常に大きな深手を負った時期でした。その労働力不足を補うという意味もありまして、外国のアルメニア人コミュニティに対して、アルメニア共産党がアルメニア教会などをも動員して、理想的なホームランドができたという宣伝を繰り返しました。そして、外国に住んでいたアルメニア人、特に中東のあたりに散在していたアルメニア人、分けても共産黨員などが中心となって、ソビエト・アルメニアに「帰国」したのです。1946年～1948年の間だけで、「帰国」したのは8万9637名という統計があります。帰還運動の期間はもう少し長かったので、その数はもっと多かったと思います。

けれども、「帰国」したといっても、この人々の運命は決して安泰なものではありませんでした。ソビエト政権からすると、外国から帰ってきたアルメニア人というのは、もちろん同胞ではあるが、場合によってはその中にスパイが紛れ込んでいるという疑いが当然ありました。ですから、帰ってきたアルメニア人にはしばしば当局の監視がつかまりました。たとえ共産黨員であっても、帰ってきた人たちは共産党組織の中で高い地位には就けない、あるいは外国から帰ってきた労働者は、どんなにがんばっても工場長のような責任ある地位には就けないというような制度的な差別がありました。さらには、政治犯としてシベリア送りになって、そこで死ぬというようなこともありました。

そのために、この帰還運動で帰ってきた人々の中には、ソビエト体制に対して強い不満を持っているということがありまして、こういう帰還者たちの子孫が、後にアルメニアが独立して非共産主義政権を打ち立てる時には、非常に大きな影響を与えたといわれています。

その契機になる事件がいくつかあります。一つは、1965年4月にあったアルメニア人虐殺五十周年集会です。このアルメニア人の悲劇を共有しようということで、人間の鎖を呼びかけたのです。これはもともと、アルメニアの中心的な大学である国立エレヴァン大学の学生たちが始めたようですが、そうすると、このエレヴァンの街中に、人口の7～8割の人たちが集まってきて、人間の鎖をつくりました。そこでソビエト政権は非常に慌て、結局エレヴァン大学の学長が事件の責任をとらされて解任されました。その翌年には、市街地のはずれにアルメニア人虐殺の記念塔を建てて、毎年4月24日の「虐殺の日」には必ずそこに行って慰霊祭をやってくれと、デモの動きを統制するようになったのです。

この時のデモの中で、アルメニア人がかつて住んでいた、トルコの東半分とな

る東部アナトリアの奪回というプラカードが掲げられました。それと同時にもう一つ奪回目標として挙げたのが、アゼルバイジャンのナゴルノ・カラバフ自治州という、比較的アルメニア人の人口比が高い地域です。このナゴルノ・カラバフ自治州も、アルメニア人のものであるというので、これを取り返そうという目標がこの時期に掲げられたのです。1920年以降ソビエト政権がコーカサスにできたのですが、そのソビエト政権が樹立された後の1921年7月5日に、共産党中央委員会のコーカサス部局において、ここがアゼルバイジャン領だと決まったのです。

その決め方に疑惑があったということもあって、アルメニア人たちはコーカサス部局を仕切っていたスターリンとアゼルバイジャンのナリマーノフの二人が悪巧みをおこなって、勝手に奪ったのだという言い方をしているのですが、この真相はよく分かりません。

ただ実際のところ、この地域はアゼルバイジャン領の中の自治州となったのです。それを取り返そうという運動が起こったわけで、特に、カラバフの統合をアルメニア人が本格的に始めたのは、ペレストロイカ期でした。

1988年2月20日にナゴルノ・カラバフ自治州のソビエトが、アルメニアへの帰属変更願を、ゴルバチョフ書記長に提出しようという議決をしました。その一つの背景としては、1987年に、ゴルバチョフ書記長の顧問だったアベル・アガンベギャンというアルメニア人が、パリで「ナゴルノ・カラバフ自治州が、アルメニアに編入される可能性がある」ということを言ったために、それがアルメニア人コミュニティの中で、非常に大きな影響を及ぼしてしまったということがあります。そのために、外国のアルメニア人コミュニティでも、本国でも、このナゴルノ・カラバフが自分達のところに返ってくるという期待が広まったのです。

1988年2月20日のこのカラバフ自治州の議決に対して、それを支持する人々が、アルメニア本国の首都であるエレヴァンで決起集会を行います。その指導者の一人が、古典学者であったレヴォン・テル＝ペトロシアンという人で、後に大統領になります。彼はまさに帰還運動で帰ってきたアルメニア人の子供です。父親は熱心な共産党員であったのですが、帰ってきたら非常に扱いが悪いために、レヴォン・テル＝ペトロシアンは非常につらい生活を送ったといわれています。

このテル＝ペトロシアンらが開いたナゴルノ・カラバフ自治州の併合支持集会は、結局ゴルバチョフが乗り込んできて説得し、解散させられました。ただこの事件の波紋はものすごく大きく、当然ながらアゼルバイジャン側からは強い反発を生み、アゼルバイジャンに住んでいるアルメニア人が襲撃される事件まで起きるといった事態になりました。

1989年6月、カラバフ統合を支持するアルメニア人たちが、アルメニア全国民運動という政党を結成します。それに対抗してアゼルバイジャン人民戦線という政党が結成され、9月にはこのアゼルバイジャン人民戦線が、バクーからエレヴ

ァンに石油を輸送する列車を妨害するなどという事件になって、このアルメニア人とアゼルバイジャンの対立は、この時期を機に一気に激化しました。

そして、1990年5月に行われましたアルメニアの最高ソビエト選挙では、その全国民運動が勝利します。さらに1991年8月のクーデターの後、9月にはソ連邦からの独立を宣言し、そして10月7日には、このカラバフに関して強硬派だったテル＝ペトロシアンが大統領に選出されました。結局、アルメニアとアゼルバイジャン人の対立は決定的なものになり、独立後の本格的な戦争に発展していくこととなります。

## ——独立後の「在外同胞」と在外政党の役割

その独立後の政権のあり方ですが、この新しいペトロシアン政権は、アゼルバイジャンと戦争を行う一方で、さらに市場経済導入も行わないといけないという、非常に困難の多い政策を行うこととなります。しかもソ連の崩壊で、原材料の供給地及び製品の市場を失うこととなります。つまりソ連時代には、たとえば、カザフスタンから皮をもってきて、アルメニアで靴にして、それをロシアに出すというように、分業体制になっていましたから、ソ連という国が崩壊するということは、同時に経済基盤そのものも崩壊してしまうということだったのです。

こういう厳しい条件下で経済復興を行わなければならない事態に直面したペトロシアン大統領は、政策を遂行するに当たって、在外のアルメニア人の専門家を積極的に利用しようと考えました。

たとえば、アメリカ育ちのラフフィ・ホヴァニスィアンという、有名な歴史学者の子供を外務大臣にするとか、あるいは、イスラエル生まれのセブフ・タシュジャンをエネルギー・石油大臣にするとか、そのようなことをして西側からの援助を受けやすいようにしました。

さらに国内の政党対策としては、共産党は風前の灯だったということもあって、非合法化までする必要もなかったのですが、それに対して、ダシュナク党と呼ばれるアルメニアの民族政党とは厳しい対決を見せました。

このダシュナク党は、1890年に成立した政党なのですが、アルメニアを代表する民族政党で、特に、ソビエト政権ができる前の1918年～1920年にかけて、アルメニアが一時期独立していた時の政権与党でありました。その後赤軍が侵入してきて、アルメニアはソビエト政権になってしまうわけですが、結局、この政党はソビエト政権に追われたあと、外国のアルメニア人のコミュニティに潜伏して、反ソ活動を行っていました。

このダシュナク党と、その分派である武装組織のASALA（アルメニア解放のためのアルメニア秘密軍）は、1990年に本国に帰ってきました。カラバフ紛争では積極的に戦闘に参加して、国民の支持を伸ばしました。

1992年5月にアルメニア本国とカラバフとをつなぐラチン回廊を完全に武力制圧して、アルメニアのものにしました。それ以降は戦闘が膠着状態に陥ったわけですが、この時点で、大統領のカラバフ対策は弱腰であるという批判をしたのです。そのためにテル＝ペトロシアン大統領は、1992年にはダシュナク党の議長であったフライル・マルヒアンを国外追放しました。さらに1994年12月には、ハンバルツム・ガルスティアンという、元のエレヴァン市長が暗殺された事件をうまく利用して、ダシュナク党そのものも禁止しました。こうしたやり方が非民主的だという批判があって、テル＝ペトロシアンの人気は下がっていきました。

さらにペトロシアン大統領にとって逆風になったことがあります。それまでアメリカには在米アルメニア人への配慮があって、この問題に関しては比較的アルメニア側の肩をもっていたのですが、1994年秋、アゼルバイジャンとの間で交わされた「世紀の契約」を境に、政策を転換します。つまり、アゼルバイジャンの石油カードにしたがって、どちらかというアルメニアに対しては、厳しい態度を取るようになりました。そういうこともあったために、アルメニアにとって、カラバフは徐々に負担になってくるということになりました。

さらに1998年になりますと、大統領はOSCE（欧州安全保障協力機構）の和平案にしたがって、ナゴルノ・カラバフを除く全アゼルバイジャン地域からアルメニア軍を撤退させて、ナゴルノ・カラバフの地位については改めて交渉を行うという案を受け入れました。そのため援助を確実にするためには、カラバフがアゼルバイジャン領になっても仕方がないということを言ったのです。これが、閣僚から強い批判を浴びて、側近が次々と辞任したために、2月3日に、テル＝ペトロシアンは大統領を辞任し、首相だったコチャリアンが大統領代行になりました。

## ——見えない壁

コチャリアンが大統領代行になると、ダシュナク党は再び合法化されます。このコチャリアンは非常に面白い経歴の持ち主で、元々カラバフの出身者です。ですから、本来は本国とは法律上は別の国、つまりカラバフはアゼルバイジャンから独立するということであって、本当はアルメニアに併合されることはなかったはずなのに、この「外国」で大統領をやっていた人がいきなり本国にやってきて首相になるという摩訶不思議なことが起こったのです。この合法化については、コチャリアンがカラバフの大統領時代に接近してきたダシュナク党から支持を取りつける意図があったのだらうといわれています。

1998年3月18日に大統領選挙が行われたのですが、コチャリアンの国籍問題が、当然ながら問題になりました。つまり、なぜカラバフ人が本国で大統領になれるのかという疑問です。その時のコチャリアンを支持する勢力の言い訳は、アルメニアの国籍条項で、アルメニア人というのはアルメニア共和国に10年以上住んで



いる人と定義されているというものでした。すなわち、この大統領選挙が行われた1998年は、1991年にアルメニアが独立してからまだ10年経っていないので、この法律に該当する人間はまだどこにも存在しないから問題ないのだという、奇妙奇天烈な理論を展開したわけです。

これに対して、デミルチアンというアルメニア共産党書記長であった大物政治家が対抗馬で出たのですが、これを何とかうまく退けて大統領になりました。そして、コチャリアン大統領は外遊を盛んに行って、アルメニア経済復興のために外国のアルメニア人団体に支援を請いました。

たとえば、アメリカのリンシー財団です。これは先ほど申しましたカーコリアンという投資家が作った財団です。その援助で首都エレヴァンの再開発事業をし、あるいはエレヴァンの空港は、アルゼンチンのアルメニア人の実業家エウルネキアンから資金援助を得て整備を行いました。

このようなことをコチャリアン大統領はやってきました。2003年にもう一度大統領に選ばれますが、この時対抗馬に出てきたのが、アメリカ人だったラフフィ・ホヴァニシアン元外相です。ところが、この時には面白いことに、ホヴァニシアンのアルメニアへの帰化が裁判所で拒否されることとなります。つまり、ホヴァニシアンはアルメニア人ではないとされて、そのために立候補できなくなりました。

カラバフ人のコチャリアンはアルメニア国籍問題が不問に付されたのに、ラフフィ・ホヴァニシアンは国籍取得が却下されたというのは、非常におかしなことです。しかし、実際政府の閣僚名簿を見てもそうなのですが、アルメニアの政権の中で、旧ソ連の他の諸国出身のアルメニア人は、今でも政権の中にいるのです。ところが西側の出身のアルメニア人たちは、現在のアルメニア共和国の閣僚の中からは姿を消してしまっていて、今では西側出身者といえば、シリア生まれのヴァルタン・オスカニアン外務大臣ただ一人です。

結局、ソ連が解体してこのように同胞間の交流が盛んになったとはいえ、旧ソ連のアルメニア人とそれ以外の同胞との間には、まだ見えない壁、つまり旧ソ連人とそうでないよそ者という壁があるということが、このような政治過程を見ても分かるのではないかと思います。

[よしむら たかゆき]